

2025年4月13日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教33「天からのパン」
 詩編145：14～16、ヨハネ6：28～33

「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」（28節）この問い合わせに対してイエスさまは「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」（29節）とお答えになられました。ここで言う「神がお遣わしになった者」というのは、言うまでもなくイエスさまのことです。イエスさまを信じること、それはイエスさまをまことの神さまがお遣わしになられた神の子と信じることでしょう。それこそが神さまの御業だとイエスさまは言われます。

わたしたちは、イエスさまを信じることが神さまご自身の御業であると考えたことがあるでしょうか。むしろそれはわたしたちの働きなのではないか。わたしたちの中から湧き出してくるものではないか。あるいは自分で学んで獲得していくものではないか。わたしたちは何でも自分の働きにしたがるところがあります。「何をしたらよいでしょうか」（28節）と。しかし、そのような自分の行為や熱心が信仰を可能にするのではないです。

信仰が、神さまとの関係の中で成り立つことを考えれば、そのことは明らかです。わたしたちはあのアダムとエバの物語にあるように、約束を破って神さまとの関係を壊しておりました。例えば、誰かと約束をする。その約束を一方が破り続けたならばその関係は終わりです。もう信用できないということになる。そのようなわたしたちが再び神さまとの関係を作るとすれば、それは神さまの方からその道を開いてくださらなければ始まらないのです。わたしたちの中にはそのように神さまとの関係を作り出すものはこれっぽっちもありません。

ルカ福音書が伝えます「放蕩息子」の譬え話を思い起こしてくださってもよいでしょう。父親の遺産を相続して家を飛び出し、散々無駄遣いしてすべて使い果たしてしまう。本来ならば勘当でしょう。二度と家の敷居を跨がせないということになる。ところが父親はその息子を再び息子として迎え入れました。「父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」（ルカ15：20）関係を修復したのは父親の方です。父親から歩み寄り、その道を開いたのです。わたしたちが神さまを信じることも、わたしたちの中の何かがそれを可能にするのではありません。ただ神さまの方から歩み寄ってくださり、道を開いてくださる。そのことによって信仰は始まる。決してわたしたちの手柄ではないのです。

ところが、ここで登場してくる人々は、やはり信仰を自分の業、手柄にしたいようです。「それではわたしたちが見てあなたを信じることができるよう、どんなしるしを行ってくださいますか」（30節）「わたしたちが見てあなたを信じることができるよう」と言います。見て信じる。見れば信じることができる。だから信じるために見えるしるし、証拠が必要だ。五つのパンと二匹の魚で五千人を満腹にしたように、そのようなしるしを行ってください。そうすれば信じます。これは信仰を神さまの御業ではなく人間の業にしているということです。神さまにではなく、自分が見て確かめられることに救いの確かさを求める。そのことをヨハネ福音書は終始問題にしています。よみがえりのイエスさまはトマスに言いました。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」（20：29）人間に救いの確かさを求めるわたしたちに対して、神さまの方に救いの確かさがある。そこに信頼すること。それが本当の幸いであるとイエスさまは教えられるのです。

その救いの確かさは、イエスさまにこそ表れました。そこにはただ神さまの御業しかありません。「はつきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」(32～33節) ここには「天から」という言葉が繰り返されます。わたしたちの信仰、救いは天から、神さまからの恵みであることが強調されています。神さまは、愛する独り子イエスさまを世にお遣わしになられました。それは天から降ってきたまことのパン、命のパンです。イエスさまがわたしたちの魂を養う本当の糧なのです。

「神の業」「働く」と訳されたエルガゾーマイという言葉を調べておりましたら、興味深いことに、この言葉は「農耕」「農業」と結びついていることがわかりました。例えば、マタイ福音書に「収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」(9:38) この「働き手」がこの言葉に関係します。またぶどう園の労働者の譬え話がありますが、この労働者のことを指す言葉でもあります。農業に携わる人たちは、収穫、実りを恵みとして捉えます。自然是自分たちではコントロールすることはできません。収穫があるのもそれは天候次第であることを誰よりも実感しているでしょう。先週は聖ヶ塔の集会に行きました。ここはかつてみかんとお茶の栽培をしていました。みかんはもうされておられませんが、お茶は少し作っておられます。集会の中でこういう話がありました。この春は各地で山火事が多く発生した。どんなに水をかけてもなかなか火が消えない。しかし雨が降ると消えるのです。夏の日照りの時もどんなに水やりしても焼け石に水。表面しか水は染み込まない。でも30分でも雨が降ればいい。雨は浸透する。「恵みの雨」と言います。天からのものに勝るものはないのです。

まさに神さまの救いは天からの恵みです。神さまは、わたしたちに信仰をお与えになるためにイエスさまをくださいました。その命を注いで、救いの道を開かれました。これは恵みの雨のようにわたしたちの中に浸透するのです。イエスさまは、まことの人としてこの地上に来られました。最後は十字架で死なれます。そこまで浸透していく、そこまで神さまの恵みは届くのです。そしてそこから三日目によみがえられます。死の淵から新しい命へわたしたちを引き上げてくださる。この十字架とよみがえりによってイエスさまを信じる実り、救いの収穫がもたらされます。

天の父よ。自分の中にはあなたを信じる信仰はありませんが、それでもあなたを信じができるように、あなたご自身が働き、天からの恵みを降り注いでくださいます。イエスさまがこの世に来られ、そして死の中にまで降られました。そしてわたしたちをそこから収穫の実りへ導きあげてくださるためによみがえられました。どうぞこの救いに生かされているわたしたちもその御業に仕えていくことができますように強め導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。